研究雑話（79）
人間発達の物質的基礎（四三）：結び（三）、「なんで」を支えに文法構造（動詞句）の習熟。

藤井力夫

前回は、一歳から二歳にかけての物を介した他者関係の成立についてお話しました。たとえば、発語「ワンワン」。大人との共同注視の成立を背景に、対象を指さししながら、目線は大人を見返り（参照注視）、発語します。予期して同期するという脳神経系の働きに言語系が介在したことになります。文法構造の獲得はこの働きを飛躍させます。今回は、質問魔・三歳児が連発する「なんで」に焦点をあて、文法構造習熟の内的必然性についてお話したいと思います。拍節リズム、パラディグマ関係、シンタグマ関係、音韻ループといったこれまでの問題の一つのまとめでもあります。

「なに」は代名詞。「なんで」は副詞。「なに」に「に」と「て」がつき、「にて」がつづまって「で」となり、かつ音便により「なんで」と変化。まさに、興味をもった内容を聞きだしたいときのことばの響きとしてピッタリです。

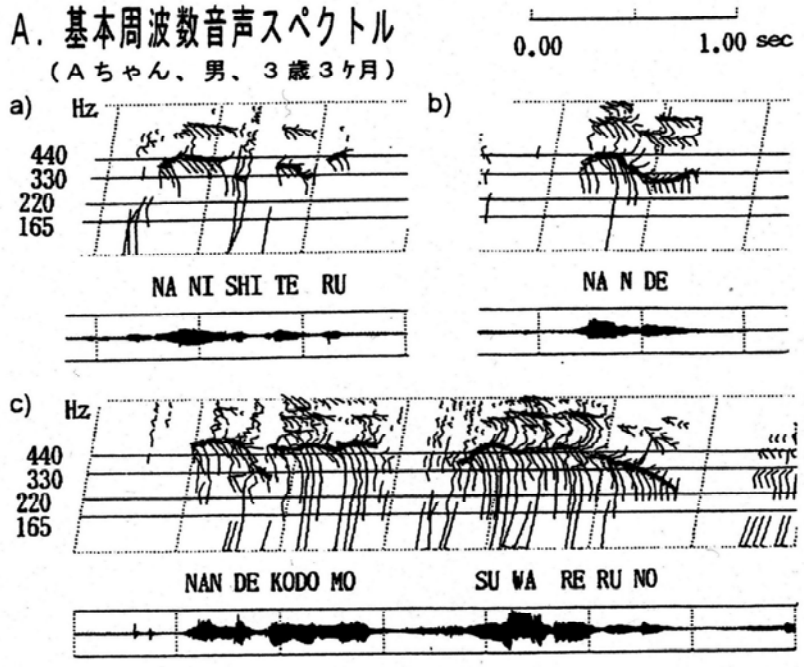
図Aは、声帯振動に該当する基本周波数音声スペクトルの包絡曲線。雑話五四、「対話の韻律」で紹介した三歳三ヶ月児・Aちゃんの同じ日の会話。お父さんと絵本を見ながらのやりとり。Aちゃんは、目に入った絵本の場面を自分の知っていることと関係づけることに一生懸命です。

「なに」よりも、「なんで」を好んで連発しています。内在する何かがあるはずです。

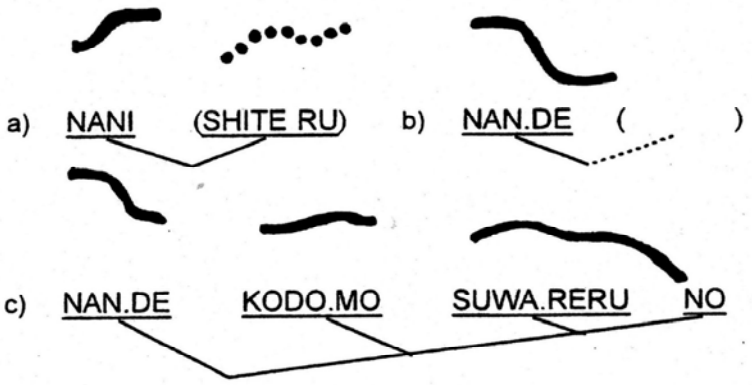
「なに」は、「に」アクセントがあり、音高を上げ、相手に答えを求めるだけです。これに対し「なんで」は「な」にアクセントがあり、撥音便で下がります。この場合、「座れるの」と続け、聞きたい中身が問えるのです。電車の運転席、彼にとって後ろから見るだけで、座ったことがありません。それで、「なんで」「こども」「すわれるの」となったのです。出だしの「なんで」がもっとも高く、句ごとに低くなり、大きなフレーズのもと小さな句を繋げています（図B）。「座れるの」などの動詞句さえ明確であれば、「こども」だとかの諸関係を付加することは、容易です。助詞が欠けていても、充分伝わります。およそ五歳ごろまでの二年間の習熟で、拍節リズムが助詞を使いこなさせます。図Cに、同日の録音資料から、「なんで」のフレーズを例示しました。子どもにとっては、知っていることとの違いさえ確認できればよいのです。

（北海道教育大学教授）

A．基本周波数音声スペクトル
（Aちゃん、男、3歳3ヶ月）



B．「なに」と「なんで」の韻律構造、動詞句。



C．その他、本児の絵本での定位、「なんで」（3歳3ヶ月）。

1)、なんで　たおれる　の。
2)、なんで　でんわ　している　の。
3)、なんで　こども　うしろ　いる　の。
4)、なんで　くるまで　きた　の。
5)、なんで　のってから　うごいた　の。
6)、なんで　とっきゅうごうで　ロビーシャ　なの。
7)、なんで　ここ　パイロットだけ　いるとこ　なの。